経験済みなキミと、経験ゼロなオレが、お付き合いする話。

長岡マキ子

ファンタジア文庫

3011

CONTENTS

プロローグ 004

第一章 006

第一・五章 ルナとニコルの長電話 069

第二章 071

第二・五章 ルナとニコルの長電話 102

第三章 106

第三・五章 黒瀬海愛の裏日記 163

第四章 165

第四・五章 ルナとニコルの長電話 214

第五章 218

第五・五章 黒瀬海愛の裏日記 289

エピローグ 292

口絵・本文イラスト magako

プロローグ

白河月愛（しらかわるな）は、学年一の美少女だ。

白河さんの存在は一年の頃から有名で、俺みたいな陰キャにも「学年一の美少女」の噂（うわさ）は届き、早い段階から認識していた。

「学年一」というのは、誰も学校の全女生徒の容貌を把握していないから便宜上言われているだけで、おそらく高確率で「学校一の美少女」なんじゃないかと思っている。

白河さんにはさらに、男心をざわつかせるような噂があった。それは「エッチが大好きなビッチで、一人の男では満足しきれないため彼氏が頻繁に替わる」というものだ。一人の相手とは長くても二、三ヶ月しか続かず、付き合う相手のテイストも、年上だったりタメだったり、体育会系だったり文化系だったりとバラバラらしい。

「それなら俺にもワンチャンあるかも」と色めき立つ者が後を絶たず、白河さんがフリーになったという噂を聞きつけると、そんなにイケてなくても彼女の周りにハイエナのように群がりにいく男たちの様子は、見ていて滑稽だと思わざるをえない。

そう、俺は自分の分をわきまえているので、さすがに白河さんと付き合えるとは思っていない。遠くから時々目の保養をさせてもらえれば、それで充分だ。

白河さんは、俺にとって太陽のような存在だ。

まぶしくて直視できない。近づきすぎてしまったら、俺みたいな陰キャはきっと、ギャッと叫ぶ間もなく消し炭になってしまうだろう。

太陽が明るく光れば光るほど、影は濃く暗くなる。白河さんが美しく輝いて見えるほど、俺は自分の陰キャを自覚する。話しかけようなんて、毛頭思わない。

陰キャは陰キャらしく。白河さんへの憧れは、胸の中にだけ秘めて。

平穏な学園生活を送るには、それが一番なのだから。

第一章

高校二年に進級して最初に思ったことは、「白河さんと同じクラスになれてラッキー」だった。

白河さんは、めちゃめちゃ可愛い。その美貌は、テレビで活躍している十代の女優たちと比べても遜色ないどころか、むしろイケてる方だと俺には思える。

印象的な大きな両目に、長い睫毛。鼻翼の小さい、すっと通った鼻筋。口角が上がった愛らしい唇。それらのパーツが、小さな顔の中に完璧なバランスで配置されている。

スタイルも抜群で、遠くで歩いてるのを見るとモデルみたいに見える。と言っても、本物のモデルみたいに痩せ細っているわけじゃなくて、短いスカートから伸びた太ももには適度な肉感があり、いつも二つくらい開いているブラウスのボタンからは豊かなバストの影がちらついている。最高だ。俺自身はギャルが好みというわけじゃないけれども、ゆるいウェーブがかかった明るめの茶色ロングヘアも、彼女に限って言えばセクシーさを引き立てているように見えるから不思議だ。

白河さんと付き合えたら。

白河さんとデートできたら。

そういう妄想をしている男は、校内に計り知れなくいると思う。

その夢を現実にするべく、同じクラスになったのを僥倖と、さっそく彼女の周りをうろつき始める男もいる。

けれども俺は、全集中で陰キャの呼吸だ。どうせ相手にされないのに、そんな無様な真似はしない。

いくら同じ空間にいようとも、白河さんと俺との間には、アクリル板よりも分厚い、見えない隔たりがある。天然のソーシャルディスタンスだ。

この距離が縮まることは、永遠にない。

そう思って、彼女の美貌を遠巻きに眺めていた。

ところが、その瞬間は、突然やってきた。

白河さんと同じクラスになって、数日経ったある日のことだった。帰りのホームルームで、白河さんが先生にプリントを提出した。確か保護者会のお知らせについての回答用紙で、昨日出すはずだったものを忘れた生徒だけが、先生に言われてバラバラと席を立って

前に来ていた。

俺は「加島龍斗」という名前で、出席番号順に割り振られた机は、たまたま最前列で、教卓の近くに位置していた。教室の後方の席からプリント片手に目の前に現れた白河さんを、なんとなく目で追っていたとき、事件は起こった。

「白河さん、これ、名前書いてないわよ」

白河さんからプリントを受け取った先生が、そう言って彼女に優しくプリントを突き返す。

「あ、ほんとだ」

受け取ったプリントを見た白河さんが、短いスカートを翻して振り返る。

そして……不意打ちで目を逸らすことができなかった俺に向かって、口を開いた。

「ね、ちょっとシャーペン貸してくんない？」

口から心臓が飛び出るかと思った。

「ぅあ？　あぁ……」

なんとかそれだけ答えて、筆箱からシャーペンを出して渡す。変な声を出してしまった

が、どうにかギリギリ、手は震えずに済んだ。
白河さんはそれを速やかに受け取り、俺の方に身をかがめる。
「……!?」
なんと、彼女は俺の机でプリントに名前を書き始めたのだ。
脂汗が出るほどドキドキしながら、至近距離で白河さんを見られる機会に胸が躍る。
近くで見る白河さんの、伏せた長い睫毛がまぶしい。かがんだ胸元の谷間も見たいのに、角度的にブラウスが邪魔して見えないのがもどかしい。
それにしても、陽キャだ。陽キャすぎる。俺だったら、たとえ自席が百メートル後ろにあっても、わざわざ戻って名前を書くところを、効率重視で、一度も話したこともない……たぶん名前すら知らないであろう異性のクラスメイトから気軽にペンを借りてしまう……その心理が、俺には何度生まれ変わっても理解できる気がしない。
白河さんを観察していると、多分にそういうところがある。自分はいつも大勢のイケてる友人に囲まれている選ばれし民なのに、日陰グループに属する生徒にも、機会があれば屈託なく声をかけてくれる。そんな現場を、一年の頃、遠巻きに何度か見たことがある。
真性の陽キャだから、そんなことができるのだろうか？　絶対的な人望があるから、周りの目を気にして陰キャを避けるようなキョロ充ムーブをしなくてもいいということなの

かもしれない。
思わぬ接近にテンパり、そんなことを走馬灯のようなスピードで考えていたとき、名前を書き終わった白河さんが、顔を上げて俺を見た。
「ありがと！」
輝くように美しい笑顔。返されたシャーペンの温（ぬく）もり。
強烈なアッパーだった。
たったそれだけの、時間としては数十秒の出来事。
けれども、それは俺が白河さんを好きになるのには充分な事件だった。
想像してみてほしい。ポスターから抜け出たような美少女が、目の前で「ありがと！」と微笑（ほほえ）みかけてくれる光景を。そして、俺が彼女いない歴十六年で、かつ異性に興味だけは津々（しんしん）な陰キャ男子なのも加味してほしい。
恋に落ちるだろ？
そんなわけで、俺は白河さんのことを好きになった。今までも憧れの対象ではあったけ

れども、より強く意識するようになった。
もちろん、だからといって、やっぱり「付き合いたい」と思っているわけではない。何かと妄想たくましい年頃ではあるが、さすがにそこまで厚かましい脳みそはしていない。
同じクラスで一年間を過ごす間に、また何か物を貸してと頼まれるとかで、ちょっぴり接近できる機会があるかもしれない……せいぜいそれくらいの、ささやかな幸運への期待を胸に、粛々と学園生活を送っていた。

そうしているうちに時は流れ、白河さんとはそれから特に接触の機会もなく、一学期も中盤に差し掛かったときのことだった。

◇

ある日の昼休み。
俺は、友達と三人で、教室の隅で飯を食っていた。
俺にも友達の数人はいる。男限定だけど。そして、この二人以外には誰がいるんだと訊かれたら、ちょっと辛い気持ちになるけど。

「ふわぁ～マジだりぃ。完全に寝不足だわ」
俺の目の前でそう言って、あくび顔で弁当のおかずを口に運ぶのは、同じクラスの伊地知祐輔、通称「イッチー」だ。
一年のときからのクラスメイトで、共通の趣味を通して仲良くなった。ゲーム漬けの不摂生な生活を送っているため、やや小太りで、ガタイのよさと背の高さも相まって、外見の存在感はかなりデカい。デカいのだが……残念ながら、悲しいくらい陰キャだ。俺が言うのもなんだけど。ちなみに、顔は元横綱の朝●龍に似ている。
「ゆうべＫＥＮが夜中に配信やるから、つい見ちゃったんだよな。そのあと明け方までゲームしちゃったし」
イッチーの発言を受けて、俺の隣で弁当を食べていた男が顔を上げた。
「俺もＫＥＮのせいで寝不足だよ。ＫＥＮが明け方ツイッターで募集かけてる通知で起きて、ワンチャン同村できるかと思って入ったら定員オーバーで弾かれたけど、悔しいから他の部屋で学校来るまで遊んでたわ」
そう言うのは、隣のクラスの仁志名蓮、通称「ニッシー」だ。去年も違うクラスだったが、イッチーが俺たちと趣味を同じくする者がいるらしいとの噂を聞きつけて声をかけ、三人で昼飯を食べるようになった。

ニッシーは、顔だけなら陽キャのグループにも入れなくもない造作をしている。くりっとした可愛い目をしていて、中学生に見えてしまうほどの童顔だけど。体格も、イッチーとは対照的にだいぶ小柄だ。二人のちょうど中間にいるのが、中肉中背でモブ顔の俺、という具合だ。

「二人とも、すげーなぁ。俺はＫＥＮの動画追うだけで精一杯だよ」

本心から言って、俺は空になった弁当箱の蓋をを閉じた。

俺たちの共通の趣味は、ゲーム……正確に言えば、「ＫＥＮ」という有名ゲーム実況YouTuberのファンという点で繋がっている。

ＫＥＮは数種類のゲームの実況プレイ動画を毎日コンスタントに配信している、元プロゲーマーだ。その高度なプレイスキルと、ユーモアを交えた軽快な実況トークが人気を呼び、YouTubeのチャンネル登録者数は百万人を超えて、今なお増え続けている。

ＫＥＮの熱心なファンは「ＫＥＮキッズ」と呼ばれ、その中でもゲームが上手いキッズにはＫＥＮ直々に声がかかって、一緒に実況動画のためのプレイングができることもある。イッチーとニッシーは、ひそかにそれを目指して、日々ゲームの腕を磨いている。

俺はといえば、ＫＥＮが一日に四、五本アップする動画を、ただ見ているだけの完全な消費型ファンだ。それだけでも、コメントをつけたりしているとあっという間に二、三時

間経っているから、なかなか暇の潰れる趣味だ。休日にはイッチーたちとオンラインでしゃべりながらゲームすることもあるが、自分でやってもＫＥＮのように上手いプレイができるわけではないので、やっぱり実況動画を見ている方が楽しい。

だが、そんな消費型ファンにもいい点はある。必要以上に無理をしないから、自分のペースで生活を送れるところだ。

「そういや、そろそろ中間の結果が返ってくるんだよなぁ」

ニッシーの呟きで、イッチーの表情が盛大に強張った。

「やめろよ～！　今回ほんと散々だったんだよ。試験期間中に新しい参加型キッズを募集するなんてＫＥＮもひどいよな」

「ほんとだよ。頑張って応募したのに結局入れないし」

ニッシーも暗い顔で答えて、ため息をつく。

「カッシーは？　テストどうだったんだよ？」

突然水を向けられ、俺は「え？」と二人を見る。そう、俺は二人から「カッシー」と呼ばれている。

「ああ……俺も自信ないよ。先生代わって初めての試験だから、今までと傾向違ったし」

俺たちは、三人とも成績はそんなに悪くない。全員、学年の上位三分の一に入るって感

じだろう。もともと第二志望で受かった高校なので、俺的にはまずまず、といったポジションだ。

「ほんとか⁉　ほんとだな⁉　裏切るなよ⁉」

「う、うん……だいじょぶだよ、イッチー」

ただ、今回は二人ともマジで試験中ヤバそうだったので、他人事ながらちょっと心配だけど。

「ヤバイんだよ、俺。これで成績下がったらゲームやめろって親から叱られるー……！」

「俺もヤベーんだよな……テストの点が悪かったらスマホ解約するって脅されてるよ」

ニッシーも同調し、イッチーがその手をガシッと取る。

「お前もか！　俺たち仲間だな⁉」

「もちろん。だから、この中で一番成績が良かった奴は、一番成績が悪かった奴の言うことなんでも聞くってことにしよーぜ」

「なんでそうなる⁉」

ニッシーの提案に、一応ツッコんではみたものの。

このときの俺は深く考えずに、その場のノリで強く拒否することもできず、そんなむちゃくちゃな約束を、なんとなく呑んだ形になったのだった。

◇

そして翌週になって、すべての科目のテスト用紙が返却され終えた、その日の昼休み。

「ダメだ……もうおしまいだ……」

イッチーの手には、赤字で「十八点」と書かれた英語の答案が握られていた。

そして、そんな点数をマークしてしまった当然の結果として、三人の中でイッチーの総合点が最も悪かった。イッチーほどではないが、ニッシーも本調子ではなく惨敗。結果、大方いつも通りだった俺が、一番の好成績ということになった。

「元気出せよ、イッチー……期末で挽回するからって言えば、お母さんもゲーム許してくれるって。なぁ、ニッシー？」

「……」

同意を求めてみるものの、ニッシーも青ざめた顔で放心している。二人とも、普段から相当親に叱られてるんだな、これは。

「二人とも元気出せって……」

なおも慰めようとしていると、イッチーが突然俺の腕をガシッと掴んだ。

「……なぁ、覚えてるよな？　あの約束」
その視線は、ゾンビのようにうつろで不気味だった。
「えっ……」
「一番成績の良かった奴が、悪かった奴の言うことをなんでも聞くってやつ」
「う、うん、一応……」
「俺からの命令だ。カッシー、好きな女の子に告白しろ」
「はぁ⁉」
突拍子もない命令に思わず大声を出してしまい、一瞬集まったクラスメイトの視線に恐れ慄く。
「な、なんでだよ？　なんでそんなこと？　飯を奢るとか、一日パシリになるとか、もっと自分の得になりそうなことが他に山ほど……」
「うるせぇ！　俺は今ドン底なんだ！　お前もドン底に突き落としてやる！　俺と同じ陰キャのお前が告白なんかしたって、惨めにフラれるに決まってる！　俺と同じドン底を味わえー！」
「なにそれひどい！」
たぶんそうなるとは思うけど、仲のいい友達から面と向かって言われると悲しすぎて泣

きたくなる。
「なんだよ、その命令！　大体なぁ……！」
「大丈夫だよ、カッシー」
抗議しようとする俺の肩に、ニッシーがポンと手を置く。
「骨くらいは拾ってやるから」
いい笑顔で言われた。急速に元気を取り戻したみたいで何よりだけど、その顔に「ざまぁ」と書いてあるのがモロ見えだ。
「お前ら、性格悪すぎるだろ！　元はと言えば、テストの成績が下がったのなんて自業自得なんだからな⁉」
「うわっ、それが本音か、カッシー！」
「カッシー、話が違うぞ！　約束しただろ⁉　俺たち、友達じゃなかったのかよ⁉」
イッチーに強めに言われて、俺はそこで言葉に詰まった。
確かに、約束はした。俺たちは友達だ。というか、こいつらが友達になってくれなかったら、俺は今頃どんな学園生活を過ごしていたかわからない。休み時間のたびに行きたくもないトイレに行って、手のシワの数を数えながら休み時間が終わるのを待っていたかもしれない……。

そんな毎日を送らなくて済んでいるのは、イッチーとニッシーがいるからだ。その二人が今、友情の危機と言わんばかりの表情で、じとっと俺を見つめている……。

「……わかったよ！　告白すればいいんだろ！」

さらば、俺の淡い恋心。

こうして、俺は好きな女子、つまり白河さんに告白することになってしまった。

とはいえ、学年一、いや、学校一の美少女かもしれない白河さんに、この俺ごときが告白するなんて、想像しただけで膝が震えるほどブルッてしまう。

でも、まあ……考えてみたら、俺がこのまま白河さんを想い続けたところで、付き合える可能性など万に一つも存在しないだろう。それどころか、運が悪ければ白河さんとクラスメイトが付き合い出したりして、イチャつきを間近で目撃するなど、精神的なダメージを受けることになるかもしれない。

そうなる前にきっちりフラれて、報われない想いを昇華させておいた方が、残りの学園生活を楽しめる。そんなふうにも考えられるではないか。

挫けそうになる心を、友との約束を守るため、そうやって必死に鼓舞した。

たとえフラれたところで、俺に社会的なダメージはあまりないだろう。白河さんの性格

を考えると、俺みたいな陰キャ男子から告白されたからといって、面白がって友達に吹聴しまくるようなタイプには思えない。告白されることには慣れっこだろうし、次の日にはもうきれいさっぱり忘れてくれてそうな気がする。

記念受験、という言葉が脳裏に浮かんだ。

白河さんは俺にとって、どうせ受かるはずのない憧れの難関校だ。試験を受けるくらいの思い出作り、やってみてもいい気がする。こんな機会でもなかったら、一生告白することなんてなかったんだから。

自分にそう言い聞かせて、必死に奮い立たせる。

……うん。そうだ。やってみよう。

震える手で、授業中、ルーズリーフに文字を書きつけた。

そして、その日の放課後、俺は早速告白するために行動した。

時間を置くと気が変わって挫けそうな気がしたし、どのみちイヤな目に遭わなくてはならないのなら、早く済ませてしまいたかったからだ。

フラれたって、別に世界が終わるわけじゃない。帰ってＫＥＮの新作動画でも見て心を癒そう。

そう自分に言い聞かせ、放課後、白河さんの下駄箱へ、授業中に書いたメモを入れた。

お話ししたいことがあります。これを読んだら校舎裏の教員駐車場に来てください。

二年A組　加島龍斗

わざわざ名前を書いたのは、匿名だと気持ち悪すぎて来てもらえないと思ったからだ。クラスまで書いたのは、名前だけだと「誰こいつ？　知らんから行かん」となるかもしれないからだ。「誰だか知らないけど、同じクラスの人間らしいから、何か用事があるのだろう」と思われることで、来てもらいやすくなるのではないかと考えた結果だ。

「えっ、カッシーの好きな人って、よりによって白河さんかよ⁉」

「高望みにもほどがあるだろ！　正気か⁉」

イッチーとニッシーが、背後から下駄箱の名前を確認して、激しくうろたえていた。

そんな二人の反応に、改めて大それたことをしようとしていると思い知らされ、膝が震えてくる。

できるなら、このままメモを回収して帰りたい……と思ってしまったが、友達に約束も守れない男だと思われたくない。

落ち着け、俺。落ち着くんだ。

今はとにかく「告白」というミッションを完遂する。それだけを考えるんだ。

深呼吸して何度も自分に言い聞かせて、目的の場所へ向かった。

校舎裏にある教員駐車場は、俺が知る限り、学校の敷地内で最も人気のない場所だ。授業が終わったばかりで部活も盛んなこの時間帯は、帰宅のために現れる教員もまだいない。十数台の乗用車が横一列に停まっているその場所で、俺は一人、ひっそりと白河さんを待った。

イッチーとカッシーは、どこかの車の陰に隠れて、ほどほどの距離から俺を見守っているはずだ。

白河さんは、なかなか来なかった。リア充な彼女は、いつも放課後になると教室で友人たちと歓談していて俺より先に教室を出たことがないから、一体どれくらいで下駄箱のメモに気づくのか見当もつかない。

待つこと……たぶん二十分から三十分。

ついに校舎の陰から彼女の姿が現れたとき、あまりにもほっとして、他のあらゆる感情よりも先に、気が抜けたような気持ちに襲われた。

来てくれないことも覚悟していたから、まだ告白もしていないのに、達成感みたいなも

のを感じてしまう。
白河さんは辺りをキョロキョロして、他に人影がないのを確かめると、俺の方へ近づいてきた。
「これ、合ってる？」
彼女が顔の横に掲げた白い紙は、俺からのメモだ。
「は……はい」
震える声で答えると、白河さんは少し笑った。
「ふふっ」
笑われた……！
そう思うと、羞恥心で顔が熱くなる。
「なんでケーゴ？　同じクラスなんでしょ？　タメじゃん？」
そう言う声に、俺をバカにするようなニュアンスは感じられない。俺の声が震えたことじゃなくて、敬語を純粋におかしく思ったみたいだ。
少しほっとしたのと同時に、やっぱり俺の存在を知らなかったのだなと思って、わかっていたけど悲しくなる。失敗するに決まってることに挑戦するのは、覚悟の上でも、しんどいものだ。

「そ……そうだね」
とりあえず、白河さんに言われた通りタメ口で答える。
こちらへ近づいてきた白河さんは、俺の二メートルほど手前で立ち止まった。
「どしたの？　話って？」
からっとした、明るい声。陰キャに呼び出されてキモ～い、なんてことは微塵も思っていなそうな、性格の良さが滲み出ている声だ。
ああ、白河さん……。
緊張してよく見ることができないけど、きっと今もめちゃくちゃ可愛い顔をしているんだろう。
俺は、あなたのことが、本当に……。
言おう。言わなきゃ。いつまでも黙って俯いていたら、性格が良い白河さんにだって愛想を尽かされてしまう。
そう思って、死ぬ気で顔を上げた。
「……！」
真っ直ぐ俺を見つめる白河さんの超絶美少女顔に心臓を射貫かれ、口は開けたものの、声が喉からうまく出てこない。

「すっ……すすすっ！」
なんてことだ、告白の言葉でとちるなんて！
でも、ここまで来たらもう言うしかない。
「す、好きです！」
やってしまった。
めちゃめちゃ陰キャ。
めちゃんこキモいわ、俺……。
自己嫌悪で、このままコンクリートの地面にめり込んで退場したいと思った。
「え？　ススキです？」
白河さんは眉間に皺を寄せ、俺をまじまじと見つめる。かと思うと、手元のメモ書きに視線を落として、さらに難しい顔をしている。
美人だ、と改めて思う。ギャルっぽい装いからおそらくすっぴんではないとは思うけれども、眼窩の影や鼻から顎にかけてのラインなど、化粧ではごまかしようのない造作の美しさに惚れ惚れする。

告白を大失敗したことによって、これ以上の恥はないと謎の余裕が生まれ、フラれる直前にして、のんきに彼女を観察できてしまう。
「ねえ、鈴木って誰？」
白河さんは、まだ険しい表情をしている。
「え？」
ほんとに誰だよ、鈴木って……と考えて、はっとした。無様な告白をしたせいで、聞き間違えられたのだ。
「いや。あの……好き、です……」
今度は、たどたどしくも、ちゃんと言えた。一度失敗して、失うものがなかったせいかもしれない。
すると、白河さんは目を見開いた。
「……あー、そういうこと？」
ややあって、白河さんはすべてを察したように俺から目を逸らした。
困っているように見えた。たぶん、俺のことを知らなすぎて、なんと言って断っていいのかわからないのだろう。
「……なんで？」

だから、白河さんのその質問は、俺への配慮からひねり出した、断りの言葉の前のワンクッションなのだろう。
「え……」
「なんで好きなの？　あたしのこと」
そんなことを訊かれると思っていなかった俺は、とっさに自問して考える。
なんで？　なんで好きかって？
そんなの……決まってるじゃないか。
「……可愛い……から」
声が震えるのを恐れて、今度は消え入りそうな声になってしまった。
まあ、でも……。
何度失敗したって、フラれるのは一度きりだ。そう思うと、少し気が楽になる。
「……」
白河さんは、目をパチパチさせて俺を見た。その頬がわずかに染まって、照れ臭そうに視線が下がる。
「ふーん……」
恥ずかしさをごまかすように呟いた彼女は、次に俺を見たとき、とんでもないことを言

った。

「じゃあ、付き合おっか？　あたし今フリーだし」

最初、何を言われたのかわからなかった。

ジャアツキアオッカ？　アタシイマフリーダシ。

ツキアウ？　付き合う？

付き合うって、白河さんと？　誰が？

まさか……俺が⁉

「ええっ⁉」

腰が抜けそうになった。

すぐに、俺をからかっているのかもと思ったが、そうだとしたら趣味が悪すぎる。

「ちょっ、何驚いてんの？　告ってきたのはそっちじゃーん！」

そんな俺を見て、白河さんはおかしそうに笑う。まさか本気なのか？　それとも、俺の反応を見て楽しんでいるだけなのか？

彼女が何を考えているのかわからない。

「……で、どーすんの？」

笑いを引っ込めた白河さんが、こちらへ一歩近づいて尋ねてくる。

「あたしと付き合うの？」

上目遣いがめちゃくちゃ可愛い。心臓が止まりそうだ。

なんでこんなことになったんだ？　こんな展開、まるで想定してなかった。

よくわからないけど、俺の身にとんでもなくラッキーなことが起ころうとしている。

ゲーム実況を見るのだけが趣味の、何の取り柄もない陰キャの俺には、この幸運をむざむざ手放す勇気もないのであり。

からかわれているのかもしれない。もしかしたら夢かもしれないけど、だったらなおさら、答えは当然決まっている。

「……はい……」

火照る顔で頷くと、白河さんは満足げに微笑んだ。

「よーし！」

笑顔が可愛い。いや、笑顔も可愛い。ＶＲじゃないよな？　こんなに近くに白河さんがいて、俺のために微笑んでくれているなんて。

夢ならどうか永遠に醒めないで欲しい。

「じゃあ、一緒に帰ろっか！　用事あるって、友達と別れてきちゃったし」
そうして、俺は白河さんと共に裏門に向かって歩き出す。
駐車場を横切っているとき、車の陰にしゃがみ込んだイッチーとニッシーの、屍のような絶句顔が目に入った。
とりあえず、あいつらが仕組んだドッキリではなさそうだと思った。

◇

なんだこれ……なんだこれ⁉
夢じゃないよな⁉
俺、ほんとに白河さんと、並んで、道を歩いてる……んだよな⁉
どういう状況⁉
付き合うって、マジなのかよ⁉
バクバクする心臓を抱えて、俺はただ黙々と足を動かしている。
歩きながら、白河さんは俺が下駄箱に入れたメモ書きをにらんでいた。
「……名前、これなんて読むの？　クワシマ？」

「カ……カシマ、リュウト」
「へぇ、リュート！　かっこいーじゃん！」
白河さんは瞳を煌めかせて笑った。不意打ちの笑顔と「かっこいい」に、さっきから上がりっぱなしの心拍数がさらに上昇してしまう。
落ち着け、落ち着け。
こんなに舞い上がっていては、会話もままならない。
どうせすぐにフラれる。数分後には「冗談だって。ほんとに付き合うと思ったの？」と笑われている。そうに決まっている。
自分にそう言い聞かせて、なんとか冷静になろうとする。
「ねー、リュート」
そんな俺に、白河さんは無邪気に話しかけてくる。
「うちらって、話したことあったっけ？」
「えっ⁉　え……っと……」
一瞬、シャーペンを貸したときの話をしようかと思ったが、あまりに些細な出来事過ぎて、「話したこと」としてカウントしているのがキモいと思われそうだ。
「……いや、特には……」

「ふーん、そっかー」

俺は俺で、気になって仕方がないことを訊いてみたい。

「白河さんは、その、なんで……俺と付き合ってくれるって……？」

冷静さを保とうと言い聞かせたせいで、本当にこの状況が信じられなくなってしまった。こんなにドキドキさせておいて、実は「今日の下校に付き合う」という話だったりすることも充分にある。いや、むしろそちらの可能性の方が高いのではないか。

というのも、俺には「告白」にトラウマがある。

中学一年のとき、めちゃくちゃ可愛い女子と隣の席になったことがあった。彼女は何かと俺に笑顔で話しかけてくれ、ボディタッチも多く、宿題を写させてあげたときなんか「そういう優しい人……好きかも」と頬を染めて囁いてきたのだ。陰キャの俺もさすがに舞い上がって、これは俺の勘違いじゃない、彼女は俺に気がある、と信じ、一世一代の勇気を出して告白した。

結果は、なんと玉砕。「加島くんのことはいいお友達だと思ってるけど……」と困ったように呟いた彼女の顔は、未だに網膜に焼き付いている。

この苦すぎる経験から、俺は教訓を得た。女の子……特に可愛くて人気がある女子のことを信じてはいけないということだ。

そもそも人気があるってことは、みんなが「俺でもイケるかも」と思ってるってことだ。それはつまり、彼女自身が思わせぶりな態度を取っているということであり、俺だけが特別だなんて思ったら痛い目を見るってことだ。

よくよく考えてみなくても、俺みたいな量産型陰キャを、人気者の可愛い女子が好きになる理由なんてまったくない。そう思うから、白河さんに告白できたんだ。百パーフラれると思っていたから、OKされたあとのことなんてちっとも考えていなかった。

だから……この状況は、ドッキリにかけられているみたいで、容易に受け入れがたい。

「え……？」

そんな俺を、白河さんは不思議そうに見つめ返す。

「なんであたしがリュートと付き合おうと思ったか、聞きたいの？」

「……だって、白河さんは俺のこと好きじゃないだろうし。俺のこと知らなかったと思うから……」

同じクラスにいるのに、名前も読めないくらいだったのだから。

そこで白河さんから返ってきたのは意外な回答だった。

「だったら、これから知って、好きになればよくない？」

「えっ？」

見ると、白河さんは小首を傾げ、上目遣いに俺を見つめていた。
「だって、リュートだってあたしのことよく知らないじゃん？」
思ってもみないことを言われて、俺は固まる。
「話したことないんだもんね？　あたしの見た目が好きなんでしょ？」
「……」
言い返せなかった。俺はさっき答えてしまっている。白河さんに、どうして好きなのかと訊かれて「可愛いから」と。
見た目が好き。それはその通りだ。
でも、一年の頃から、ずっと白河さんを遠巻きに見てきた。いつも「可愛いな」と思って、憧れていた。だから自分の方がずっと白河さんを好きだと思っていたけど、言われてみればそうだ。俺は白河さんのことをほとんど知らない。
「それに、あたしリュートのこと、ちょっと好きだよ」
「……えっ⁉」
予想外の発言に、衝撃と共に白河さんを見る。そして、上目遣いの可愛いアングルにやられて、ダブルで脳がスパークした。
白河さんが俺よりだいぶ背が低いから、隣にいるとそういう目線になるのだろう。モデル体型に見えるのは、顔が小さくて均整のとれたスタイルのおかげで、身長自体は高い方じゃない。

あと、さっきからずっとフローラルだかフルーティだかよくわからないいい匂いがするんだけど、これって白河さんの匂いだよな。香水とかつけてるんだろうか？
って、今はそんなことを考えている場合じゃない。
白河さんが俺をちょっと好き？
いや、それはないだろ！
だって俺のこと知らなかったじゃん！
俺の心のツッコミを察知したように、白河さんは口を開く。
「さっき、リュートがあたしに『好き』って言ってくれたじゃん？」
「……うん」
「だから」
「……え？」
「え？　何が『え？』」
「いや、えっと……そ、それだけで……？」
信じられないと思って呟くと、白河さんは何を思ったか憤慨顔になる。

「あー！　あたしのこと、誰のことでも好きになるビッチだと思ってる？　あたしにも好みはあるんだからね？　爪の白い部分が伸びまくってる男と、鼻の下に汗かいたまま放置してる男は死んでもムリだから！」

好み、ピンポイントすぎない!?　ってか、ＮＧそれだけなのかよ!?

白河さんの噂通りのストライクゾーンの広さに驚愕していると、彼女は抗議の余韻を残したむくれ顔で俺を見つめる。

「でも、リュートはそうじゃなかったから。だから、嬉しいって思ったよ」

白河さんが言っていることは、確かにわからなくもない。もし俺が全然知らない女の子から「好きです」と告白されたら……その子がよほど好みじゃない場合を除いて、一瞬で好きになってしまうだろう。

だが、それは俺が一度も告白されたことのない、完全にモテない男だからだ。

「……でも、白河さんは『好き』なんて言われ慣れてそうだけど……」

「えー？」

何言ってんの？　というように、白河さんは俺を見上げる。

「誰に何回言われてても、人に『好き』って言われたら嬉しくない？」

それはそうだと思うけど……。

「その嬉しさって……『付き合おう』って思うくらいの嬉しさ？」

俺はまだ疑ってる。自分が傷つきたくないから。

明日になって「やっぱ、あんま好きじゃないから付き合うのナシ！」と言われる未来を想像してしまうと、耐えられない。

だって、このままもし本当に「付き合う」ことになってしまったら、今日より明日、明日よりあさってと、俺は確実に、白河さんをもっと好きになってしまうと思うから。

信じられないことに……これはどうやら冗談ではなさそうだから。

「つまり……白河さんの俺に対するその『好き』って、友達でも充分成立するっていうか……ちょっと……薄くない……？」

言ってしまった。せっかくこんな超美少女が付き合ってくれるって言ってるのに、みすみす嫌われるようなことを口にしてしまった！

バカだ。

俺は身の程知らずの大バカヤローだ！

案の定、白河さんは少しの間無言だった。やはり気分を害してしまっただろうかと焦っていると、白河さんは俺を見た。

「……だから？　別によくない？」

返ってきたのは、あっけらかんとした言葉だった。
「薄っぺらくても、いい感じじゃんって思って、もっと知りたいと思ったんでしょ？　だったら付き合ってみればいーじゃん。最初は薄っぺらな『好き』同士でも、そうやって付き合ってるうちに、いつか本物の『好き』になるくない？」
形のいい口角をきゅっと上げて俺に笑いかけ、白河さんはそう言った。
「……まぁ、今まで『本物の好き』になるまで付き合えたこと、ないんだけどさ」
そこで自嘲気味な微笑になる彼女に、俺はおそるおそる尋ねる。
「……なんで……？」
一人の彼氏と長くて二、三ヶ月しか続かないという噂は本当なのかもしれない。だとしたら原因はなんだろうと警戒する俺に、白河さんは「あっ」と目を見開く。
「あたしが飽きて捨ててると思ってる？　それ逆だから！　あたし、付き合ってる間はめっちゃ一途だし！　他の男子に告られても即断るし」
「そ、そうなんだ」
彼女の勢いに押されて相槌を打つが、俺の美少女不信は根深い。
「……でも、さっきの白河さんの発言からすると、彼氏がいても、人から『好き』って言われたら嬉しくなって、ちょっと好きになったりしない？」

「はぁ？　何言ってんの？」
白河さんの眉間に、盛大に皺が寄る。
「……」
ギャルの不機嫌顔の凄みに負けて、陰キャの俺は押し黙った。
「好きでもない男に『好き』とか言われても、迷惑でしかなくない？　マジキモいんだけど」
「……」
さっきと言ってることが違う……。
しかし、ともかく付き合ってる間は一途というのは信じてもいいみたいだ。
そんな話をしていると、白河さんが急に立ち止まった。
「家、どっち方面？」
言われてみれば、もう駅前だった。学校の最寄り駅は、大きなターミナル駅ではないけれども、今歩いている改札へ続く道が、帰宅ラッシュ前のこの時間帯でも人通りが絶えない程度には栄えている。
俺たちの高校は都内の私立校なので、生徒の多くが電車通学をしている。このO駅はJRと地下鉄で入口が分かれるから、今このタイミングで白河さんは訊いてきたのだろう。

「え、えっと、K駅」
「ふーん、うちA駅」
「そ、そうなんだ……近いね」
俺の最寄りのK駅はここから三駅、A駅はそれより一つ手前の二駅目だ。
「てか、そしたら同じ電車じゃん？　行こ行こ！」
「う、うん……」
白河さんのペースに乗せられ、俺は彼女とJRの構内へ向かった。

電車に乗ると、二駅だからすぐに白河さんが降りる駅に着いてしまう。この信じられない状況も、ここでひとまず終了する。
さっきまで、こんなにドキドキしていたら身が保(も)たないと思っていたのに、そうなると名残惜しい気もしてくるから不思議だ。
「もう着くね。じゃあ……」
いよいよA駅が近づいてきたので送り出そうとすると、白河さんは「えっ？」と意外そうに俺を見る。
「家まで送ってくんないの？」

「えっ？」
学校から帰るのに「送る」という発想がなかった。
けど、確かに、家まで送ってあげた方が彼氏っぽい。
「じゃ、じゃあ……」
信じられない状況、続行。
定期で途中下車する分には運賃も取られないし、俺もA駅で降りて、白河さんを家まで送ることにした。
A駅は大きなターミナル駅で、駅前には繁華街が広がっている。それを抜けて十五分ほど歩いたところに、白河さんの家はあった。
その間に何を話したか、正直なところ、よく覚えていない。「白河さんと付き合う」という現実味のない事実が、いつもの通学順路を外れたことで俄然(がぜん)現実感を伴って襲いかかってきて、ドキドキとテンパりで会話に集中するどころではなかった。
「うち、ここなんだー」
白河さんがそう言って立ち止まったのは、木造二階建ての一軒家だった。なかなか年季の入った外観で、周辺一帯も同じような雰囲気の家々が建ち並んだ、渋めの住宅街になっている。

白河さんの垢抜けた風貌からは予測のつかない家の佇まいに、なんと言っていいかわからず「いい家だね」と無難にコメントする。

すると、白河さんは嬉しそうに微笑んだ。

「ほんと？　ありがと！」

お世辞を一ミリも疑っていない、素直なお礼の笑顔だ。

「……」

その可愛さにまたドキドキするのと同時に、申し訳ない気持ちになって、早々に場を立ち去りたくなる。

「じゃ、じゃあ、俺はこれで……」

踵を返しかけた俺に、白河さんは明るく声をかけてきた。

「ねえ、うち寄ってく？」

「……えっ⁉」

「親は仕事だし、おばあちゃんは今日フラダンス教室でいないから」

おばあちゃんと同居してるんだ……フラダンス教室って、おばあちゃん若いな……などという雑念が脳裏をかすめたが、それより重大なことは。

白河さんの家に寄る。

誰もいない、白河さんの家に……入る。

二人きりで。

「……い、いいの？」

緊張で生唾を呑みながら訊くと、白河さんはなんの躊躇いもなく頷く。

「うん。リュートは彼氏だし」

いや、だからって。つい先ほどまで名前も知らなかったモブクラスメイトだったのに？と心でツッコむけれども、本人がいいと言うんだから、俺が遠慮する理由は……ない、んだよな……。

俺、死ぬのかな？

こんな出来事、俺の人生に起こるわけなかったのに。

「えっと、じゃあ……お邪魔します」

こうして、俺は付き合い始めて三十分後、人生初の「彼女」……のお宅に、恐れ多くも、早速お邪魔することになった。

まだ騙されてるんじゃないかという気がしているが、俺は今「白河さんの家」に足を踏み入れようとしている。

足元がフワフワして、再び現実感が消え去っていく。

「し、失礼します……」

玄関に入ると、どこか懐かしいような他人の家の匂いに包まれた。三和土には白河さんのものと思しき派手な婦人靴がいくつも無造作に置かれていて、その生々しさについ動悸が増してしまう。

「上がって上がって。あたしの部屋二階だから」

白河さんに促されるまま、すぐ目の前に見える狭めの階段を上った。

二階には、入口が襖の和室らしき部屋と洋室風のドアの部屋があって、白河さんは後者のドアノブを回した。

「どうぞ～」

そう言って見せられた部屋は、ようやく白河さんのイメージ通りと思える雰囲気の空間だった。

五畳ほどのスペースでまず目に飛び込んでくるのが、カーテンとベッドの掛け布団カバーの、濃いピンク。壁際に置かれた白いドレッサーとクローゼットは、若干チープ感はあ

るものの女の子が好みそうなオシャレなデザインだ。間に学習机らしきものもあるが、机上はポーチや小物で埋め尽くされており、とても勉強できるような環境ではない。

全体的に、至るところに置かれた化粧品っぽい小瓶や、マスコット的なぬいぐるみ、アクセサリーらしきキラキラしたものなど、小物の多さに圧倒される。それでも無秩序に散らかっているというわけではなくて、本人なりにこだわりを持ってディスプレイされたものであろうことがうかがえる。

加えて、フローラルだかフルーティだかの白河さんの匂いが、むせ返るくらい濃く漂ってくる。想像以上に女子部屋全開だった。

「どしたの？　早く入りなよ」

女の子の部屋に免疫がなさすぎて圧倒されている俺に、先に入室した白河さんが声をかける。

「あっ、ああ、うん……」

いつまでも突っ立っているのも不審だと気づいて、慌てて中に入った。

「テキトーに座ってー」

白河さんは軽く言って、学校カバンを無造作に床へ置く。

「飲み物取ってくるね。麦茶でいい？」

「あ、う、うん、ありがとう……」
白河さんが部屋を出ていく。階段を下りる軽やかな足音のリズムが、俺の激しい動悸と妙にマッチしていた。
一体なぜこんなことに……。
フラれる心の準備しかしていなかった俺が、白河さんの「彼氏」として、彼女の自宅の部屋にいる。この事態を、自分でもまだ信じきれていない。
でも、とにかく。
俺は今、あの白河さんの部屋にいるんだ……。
「すーっ……」
とりあえず、鼻で大きく深呼吸してみる。
これが白河さんの匂い……。
そう思って感無量になり、はっとする。
キモすぎるだろ、俺！　何やってんだよ！
でも、憧れの女の子の部屋に、たった一人でいるというこの状況。よからぬことをしたい衝動で暴走しそうになってしまう。
そう、たとえば……引き出しを開けてみたい、とか。

幸いと言うべきかなんと言うべきか、部屋の入口近くに、つまり俺のすぐ傍に、白いチェストがある。いかにもプライベートなものが……はっきり言えば下着の類が仕舞われていそうな佇まいのそれから、目が離せない。
駄目だ！　それだけは男として、人としてやっちゃいけない！
でも……見たい……。
しばらくの葛藤のあと、心の中の天使と悪魔の決着がついた。
勝利したのは、悪魔だった。
「ちょっとだけなら……！」
罪悪感から口の中で言い訳して、すばやく引き出しに手をかける。それが数センチ開いたところで、思わず感嘆の声が出た。
「おお……」
目に飛び込んできた白いレースが、あまりにも神々しすぎて手が止まる。
これが……白河さんの……プライベートな衣類……！
それを目にすることのできた幸せを噛み締めて、天を仰いでいたとき。
「お待たせー」
「うわっ⁉」

びっくりしすぎて、誇張ではなく床から数センチ飛び上がった。その拍子に、今開けた引き出しに、盛大にぶつかってしまう。

「イッテ……ッ！」

やべっ、まだ閉めてない……！

「あれ？　そこ開いてた？　ごめーん」

だが、引き出しが開いていることに気づいた白河さんは、俺を疑う様子もなくそこに視線を向ける。そして、「あ！」と目を輝かせ、両手に持った麦茶をチェストの上に置いて、中から白いレースをつかんで出した。

「ねえ、これ見てー」

「……!?」

なんてものを披露する気だ!?

そう思って固まっている俺に向かって、白河さんはなんの躊躇もなくそれを広げて見せる。

「じゃーん！　ちょー可愛くない？　この前買ったキャミ！　背中が空いたトップスのときに着ようと思ってー」

「……」

目の前に広げられた白いレースのキャミソールを見て、謎の脱力感に襲われた。

「う、うん、いいね……」

いや、白河さんの私服を見られただけで充分すごいことなんだけど、下着だと思い込んでいたのでガッカリ感が否めない。

見せキャミ……見せキャミか……。

やっぱり、人の部屋のものを勝手に見るのはよくない。こんなことはもう二度としないと心に誓った。

「じゃ、お茶飲もー」

と、白河さんは再び麦茶を両手に持つ。

「座って、座って」

「あ、うん、ありがと……」

気を取り直して、勧められた通り座ろうとする。

しかし、どこに？

部屋にソファや座椅子のようなものはない。勉強机の椅子にはストールのようなものがかかってるし、そうなるともう板張りの床に直に座るか、ベッドに座るかしかなくなる。

ベッド……。

いやベッドって!?

そりゃもちろんベッドをソファ代わりに使うことだってあるだろうし、ベッドに二人並んで普通におしゃべりすることもあるだろうけど……いや、でも、この状況じゃ無理じゃね!?

この部屋の持ち主は、ずっといいなと思っていた学年一の美少女で、信じられないことに、さっき俺の「彼女」になった白河さんだ。

ベッドに並んで座ってしまったりしたら、とても正気ではいられない。

「……あ、そういうこと？」

なおも座らずにいる俺を見て、白河さんは何を思ったのか、急に得心顔になった。

「いいよ。シャワー浴びてくる？　お風呂一階だから案内しよっか？」

「えっ!?」

な、何？　今度は何を言われてるんだ？

シャワーなんて言われたら、思考がますますそっち方面に行ってしまうじゃないか……。

それとも、白河さんは極度の潔癖症で、風呂に入った客しか部屋に入れたくないとか？

それとも暗に「臭い」と言われてる？

いやいや、違うよな。さっきまで普通に座れと言ってくれてたし……とグルグル考えて

いると、白河さんはまたしても「あ、そういうこと？」とひらめいた表情になる。

「リュートはシャワーいらない派なんだ？」

え？　いっ、いや、やっぱそっち方面の話？

混乱する俺は、彼女の次の行動に度肝を抜かれた。

白河さんは麦茶のコップを再びチェストに置き、自分の制服の胸元に手をかけた。

「今日体育あったし、ちょっと汗臭いかもだから恥ずいけど……」

そう言いながら、ブラウスのボタンを一つ外す。日頃から二つ開けられていて開放的な胸元が、第三ボタンが開いたことでさらに露わになり……ブラジャーのレースがチラ見えする深い谷間に、思わず釘付けになって生唾を呑んだ。

こ、これは、正真正銘、白河さんの下着（本人装着済み）……って、ダメだダメだ、そんなマジマジ見たらドスケベだと思われる！

だが、そんな俺の葛藤をよそに、彼女はさらなるボタンに手をかけ、迷いなく外そうとする。

「しっ、白河さん!?」

そこでようやく確信が持てた。

ここまで来たら、もうそっち方面の話しかない。

さっきのシャワー云々の話。そして、今の発言。それが意味することは一つ。
もしや……いや、もしやどころじゃなく、もう、間違いなく、そうだ。
彼女は俺と、エッチなことをしようとしている……のだ。信じられないことに。
えっ、マジ⁉
いいの⁉
この暗黒の童貞生活から、まさか今日おさらばできるなんて、今の今まで思ってもみなかった。
しかも、相手が白河さんだなんて。
信じられない僥倖……いや、でも、しかし！
ほんとのほんとにマジなのか⁉
「ちょ、ちょっと待って……！」
俺の驚愕の声に、白河さんはボタンを外す手を止めた。
「ん？　どしたの？」
不思議そうな白河さんに、俺は生唾を呑みながら言った。
「な、何してん……です？」
やっぱり早すぎる。いくら妄想盛りの男子な俺でも、こんな急展開は想像していなかった。

続きは、9月19日発売のファンタジア文庫で！

©Makiko Nagaoka, magako 2020